

投句欄 自由律の泉 ⑥

- 1 焼き芋新聞で包み貧しくやさしかった 金澤ひろあき
- 2 春隣湧き上がる雲の赤ちゃん 野谷真治
- 3 草の中にタンポポの灯を探す春の夕 アカホリフキ
- 4 背中から老いたその背中を見送る 久光良一
- 5 コミュニケーションは食べ物 大きくなる 大岳次郎
- 6 振りかえるたびに眩しくなる枯野 棚橋麗未
- 7 言い訳はやめとくすこし塩味の桜餅 ちばつゆこ
- 8 ラジオを流れる談志の残り香 佐川智英実
- 9 思いがけず旅が始まる写真の断捨離 白松いちろう
- 10 不発弾敗兵の骸を曝し雪片 小山 榮康
- 11 溶け落ちて少し離れてKOSMOS 檜 幽可
- 12 はこべの花芽ここにも春 佐瀬広隆
- 13 枯れた梅に花が一輪 俺ももう一度 高村昌慶
- 14 向かうところある男に寒月も優しい 部屋慈音
- 15 草だんご買う君を信号が待ってる さいとうこう
- 16 お日さまうるさく目をいじめてくる 無一
- 17 茶柱が立つ冬の朝 和崎はると
- 18 蛇に足がある 平和でしょうか 井尾良子
- 19 白髪に晴れ着きせかえ想う人 亀山英翔
- 20 晩鐘の中で さくら満開 平岡久美子
- 21 河原の小石と話して今日が終わる 富永鳩山
- 22 春を引き返す雨に猫は三本足 富永順子
- 23 折り紙の様に生きられればと人生 荻島架人
- 24 鮮やかに緑が芽吹く 田中美太

● 泉 ⑤より 一句鑑賞

味ない煎り大豆の味が父

大岳次郎

▼菓子などなかった時代に育った私たちには煎り大豆は貴重なおやつであり、時には主食の不足を補うものでもありました。特に砂糖の助けを借りなくても、よく噛んでいるとほんのりかすかにやさしい味がしたものです。(久光良一)

過去をわかって親父が飲んだ酒

荻島架人

▼たぶん子どもの側の視点で描いている。「過去」は、誰のどんな過去なのか述べられていないが、重いものを感じる。今、父親のその時の心境がわかるようになったという事も伝わる。ドラマを見ているようだ。(金沢ひろあき)

▼どんな過去か第三者は詮索はしない。一夜限りのお酒であってほしいと思う。そんな父親の姿を、理解する作者がいる。(ちばつゆこ)

▼私の父も、休日は朝から、飲んでいました。今それが、わかる気がします。(田中美太)

待つ理由が分からない目を半分閉じる 白松いちろう

▼理由が分からない状況のなかで、その不安が半眼の表情をつくり出す。その先を探ろうとする心模様が伝わってくる。(部屋慈音)

不都合な真実はシュレッダーの餌になる 久光良一

▼都合の悪いことは「記憶にございませぬ」「記憶にもありません」「探しましたが見つかりませんでした」「バレる前にシュレッダーにかけて砕いてしまうのが一番安全でしょう。(高村昌慶)

たばこぎつしりの箱をひろう禁煙の手 無一

▼ぎつしりと入った煙草を見つけて、運がいいのか悪いのか。その後どうしたのかが気になります。(佐川智英実)

補助輪つけ春が走りだす

さいとうこう

▼春が始まる。あるいは、春が来たか。補助輪が興味深い。新鮮なイメージがある。(野谷真治)

うかうかと生きて十文三分の靴あと 平岡久美子

▼作者はうかうかと生きて来たと言うけど決してそうではない。十文三分の靴でしっかりと大地を踏みしめながら一歩一歩生きて来た。うかうか生きていたら靴あとなどつかない私には自分自身を褒めているように思える。(井尾良子)

▼うかうかと生きると、何でも、しまらなくなってしまう。

十文三分は、男の足なら少し小さいが、女性ならパールバックかもしれない。つまりは、自戒とみるのが妥当であろう。そういう私は、実に小さい足なのである。(大岳次郎)

お地蔵様の前掛け朽ちたまふるさとのお正月

富永順子

▼地域を見守ってこられた「お地蔵様」が大切にされなくなるのは、わびしいものですね。

(無 一)

▼道向いに前掛けが破れた石地蔵が建っていて、句と同じ情景が広がり周りの集落には六人の孤老が臥せている。お正月も淋しいものでこの句には身がつまされる人生があつて心をうちます。

(小山榮康)

▼作者がお正月に故郷に帰った時、近所を散歩中に、昔のふるさとでの時を思いだしている様子が思い起こされるようです。

(アカホリフキ)

空つ風の風の刃襟足を掠める

佐瀬広隆

▼有名なのは「赤城風の空つ風」毎年の降雪は大したことないのですが、吹き続ける氷点下の風は凄い。正しく襟足を掠める刃の如しと比喻とも受け取れて、怖い奥方の一撃なのでしょう。

(檜 幽可)

▼突然の冷たい空つ風が襲う寒さを的確に捉えています。「風の刃……」という表現に厳寒の震えが込められていて迫力があります。

(白松いちろう)

灯火管制 息を殺して生きていた

富永鳩山

▼徳山の空襲を語り継ぐ会の「とけたビー玉」という紙芝居を鑑賞した。その紙芝居の机の両サイドに錆びついた鉄の管(直径20cm位、高さ50cm位の円筒)を置いての公演

でした。これが焼夷弾の葉莖だと初めて知りました。

(和崎はると)

▼たぶん、現代の若い人は、「灯火管制」を疑問視することでしょう。日本は昭和の初めから戦争が続き、敵機襲来に備えて灯火管制、息をひそめて防空壕にかくれた時代、平和とは本当に有難いことです。

(棚橋麗未)

着ぶくれて次の言葉がでてこない

棚橋麗未

▼あります、あります、どうしてなのでしょう。以前はもつとシヤキシヤキと何事も運んでいたはずなのに？ だけど「加齢」なんて言葉で片づけないでほしいですね。

(平岡久美子)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の投句用紙、またはメールにて。

〈送り先〉〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

〈締め切り〉 2020年6月10日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください(投句用紙にチェック欄があります)。